



ルー  
テル

# 藤が丘だより

発行 月報委員会

発行日 2022年7月3日

No. 98

あなたがたは皆、信仰により、  
キリスト・イエスに結ばれて神の子なのです。  
ガラテヤの信徒への手紙 3章26節



礼拝献花より

## 御言葉に生きる

実に、信仰は聞くことにより、しかも、キリストの言葉を聞くことによって始まるのです。  
ローマの信徒への手紙 10章17節

ルター派キリスト教会 日本福音ルーテル藤が丘教会 牧師 佐藤和宏  
〒227-0043 横浜市青葉区藤が丘 2-31-21 tel 045-973-2729/ fax 045-439-7009  
URL:<https://www.jelc-fujigaoka.org/> mailto: [fujigaoka@jelc.or.jp](mailto:fujigaoka@jelc.or.jp)



## シリーズ説教

### 『イエスの顔』

牧師 佐藤和宏

ルカ9章51～62節

説教題を「イエスの顔」としました。

た。福音の日課に「顔」という言葉が繰り返して用いられ、「イエスの顔」について語っているからです。一つは51節にある「決意を固めた」という部分ですが、直訳すると「彼の顔すなわちイエスの顔を固める」となっているのです。こうして、ルカによる福音書ではこの9章51節から、具体的にエルサレムへの道、十字架への道が始まると、見なされているのです。二つ目の「顔」は52節の「先に使いの者をだされた」という箇所。「先に」という部分ですが、直訳すると「彼の顔の前に」となるのです。「イエスの顔の前に」使いの者が遣わされたのですが、それは「イエスのために準備」することを目的としていたことがわかります。三つ目の「顔」は53節でサマリア人がイエスを歓迎しなかった理由として「イエスがエルサレムを目指して進んでおられた

からである」とある箇所になります。具体的には「イエスが」という部分になります。これも直訳すると「彼の顔が」となるのです。イエスの顔がエルサレムに向けられていたこと、これがサマリア人がイエスを歓迎しなかった理由とされています。

さて、第二の朗読でお読みいただいた、ガラテヤの信徒への手紙5章に、次のようにありました。「この自由を得させるために、キリストはわたしを自由の身にしてくださったのです。」「兄弟たち、あなたがたは自由を得るために召し出されたのです。」「これらの記述から、「自由」が主題とされていることがわかります。

宗教改革500年の記念事業として、江口再起先生をお迎えし、「キリスト者の自由」を読む」という本から学んだことがあります。この本における「自由」という項目を担当して執筆された、江口先生は「2つの謎の命題」として、これはパウロの次の言葉の説明なのだとしています。パウロはコリントの信徒への手紙一で「わたしは、だれに対しても自由な者であるが、すべての人の奴隷になりました。(9章19節)」と

書いているのです。何の自由について言っているかといえば、その直前の箇所「偶像に供えられた肉」と小見出しがある部分があるのですが、コリントの教会の人たちから、パウロは相談を受けていたようです。それは「偶像に供えられた肉」の扱いについてです。まずパウロが答えているのは、「世の中には唯一の神以外にいかなる神のいない」のだから、「世の中に偶像の神などない」ということです。ですから「偶像に供えられた肉」といっても、普通の肉と何らかわらないと教えています。江口先生は次のように書いています。「ところがコリントの教会の一部の人は、昔からの習慣から、それを食べると穢れてしまうと、混乱してしまっているのです。パウロは答えています。

に、その自由を行使しないと云っているのです。これが「キリスト者の自由」の冒頭に示される、2つの矛盾するようにみえる命題が示していることなのです。

「偶像に供えられた肉を食べることは、まったく自由である。とはいえず、自由だからといって、心が混乱してしまう人の前で食べるならば、その人の心はますます混乱してしまうだろう。そういうことであれば、その人のために私はあえて自分の自由を放棄して、その肉を食べない」。パウロは自分は自由だが、弱い人のため

「イエスの顔」は、十字架への道への決意の中に、弟子たちを派遣する時に、エルサレムで遂げられることの中に、見いだされるのではないかと思つたのです。これこそ、ルカが「イエスの顔」について、三度にわたってあらわした意図にちがいないのです。イエスは今日、その顔をエルサレムへと、そこで成し遂げられようとしている十字架へと向け、固められたのです。何ものにも縛られない自由な君主でありながら、私たちすべてのものに自由をもたらすために、すべてに仕える僕となられたのです。主がこのように自由な意志をもって仕えてくださったのですから、この主に仕え、そしてすべての人々に仕えることが出来るのです。主キリストに結ばれた一人ひとりとして、主イエスの顔をあらわす者として、すべての人々に仕える群れとなつて、遣わされてまいりましょう。(聖霊降臨後第3主日)

## 山口麻衣先生による講演会

# 『人生の円熟期を豊かにするには』に学んで

○田○郎

6月12日の礼拝後、13時から山口麻衣先生から掲題のテーマでご講演をいただきました。感謝と共に個人的な所感をここにまとめてみました。

小学生の私を聖書に導いた父は、80歳でコンピュータを学び、98歳で亡くなるまで多くのエッセイをコンピュータで書き残しました。心身ともに健康で、なんと97歳まで運転もしていました。その父や、80代後半



で認知症が始まった実母、そして認知症を患いながら藤が丘教会に通い皆様に暖かくケアしていただいていた義母を思い出し、もっと優しくしてあげるべきだったなど、あれこれ悔やみながら講演をお聴き致しました。

人口問題には、少子化の問題と高齢化の問題があります。ある国が少子化対策に成功しつつあって、日本も学ぶべきだと一部で言われ始めた矢先、今年二月にその国を肯定的に評価することは、日本では一切タブーとなつてしまいました。日本は高齢化問題に集中せよという神のご意思なのかもしれないと、冷静に受け止めることにしています。

常日頃から、もし私が政治家だったらこのような法案を議会に提出したであろうな、と考えてきた持論があります。ちょっと過激ですが、へ介護活動徴兵令」と呼ぶべき案です。「70歳に達した日本国民は、斟酌すべき事情がない限り全員、介護ボラ

ンティアに一年間従事することと定める。それを経た者だけが、将来介護ケアを受ける資格を持つ」というものです。介護要員の不足や過労という事態への対策であると同時に、

将来誰もが介護を受ける立場になる前に介護する側の気苦労を理解しておくなど、最高の解決策であると信じてきました。ところが、今回のお話を聞いているうちに、私の最高の提案も何か凡庸なアイディアに思えてくるのでした。(あまり大きな声で発言してこなくて良かったかな、と。)講演を通して、このテーマに地域社会が自発的に共に取り組む機運があることを感じ、それが一番のよい気がしてきたからです。

講演の前夜に、関連するテーマで妻と語り合いました。18〜19世紀はクラシッくな芸術が頂点を極めた時代。妻は音楽への関心から、私は文学への関心から、二人ともそれぞれにその時代にこだわってきました。そこには、音楽でも文学でも死を意識した芸術がたくさんあって心を激しく揺さぶるのですが、高齢を生きること意識したものには皆無なのです。つまりこのテーマは、高齢化社

会という社会科学上の問題として、また「高齢を生きる」という私たちの心の問題として、きわめて21世紀的なのだと気づいたのでした。

さて、講師としてお招きした山口麻衣先生は、ルーテル学院大学教授であると同時に日本ケアラ連盟理事として、この課題にコロナ禍の下でご活躍してられました。講義の内容を順を追って感想を述べていきますと、まず冒頭で紹介いただいた篠田桃紅さん(アーティスト・エッセイスト・詩人)の「確実に少しずつ衰えているが、手探りでしっかりと老いをつかみながら生きていきたい」「歳をとるといことは、創造して生きていくということ」という言葉が印象的でした。何度も繰り返し噛みしめたいと思う言葉です。先のクラシッくな視点に帰ると「哲学は死の学び」であり、人は「生まれたときから死に向かって歩む」わけですが、21世紀では「生まれたときからエイジング(歳を重ねる)が始まり、高齢でそれが極まってく」という視点が必要なのだと感じるこ

とができました。

総括的に、人生百歳時代と生涯現

役社会が到来し、支える世代と支えられる世代に分けられる時代から、年齢に関わりなくすべての世代が、それぞれの状況に合わせて、学べる・働ける・休める時代へと変わってゆかなければならない、ということがこれからの私たちの指針になりそうです。

また、私はいわゆる「陰謀論者」であるかのように「社会で広く信頼されている組織」に対して強烈な不信感を持っているのですが、厚生労働省や国連やWHOにも意外に良い側面があるのだと知ることができ、私の偏屈さを少し矯正することができたようです。(1)厚生労働省では「誰もが役割を持てる地域共生社会」が提唱されているようです。高齢者のフレイル(要介護状態に至る前段階)予防と認知症予防は、虫歯予防等とは違って避けるべきものではなく、受け止めていくものだと思ひました。(2)国連は「健康的なエイジングの十年」を提唱し、①年齢に優しい環境、②エイジズム(年齢による差別)を撲滅する、③高齢者への包括的なケア、④包括的な介護(長期ケアの連続体)、などへの私たちの配

慮を促しているようです。(3)WHOは「アクティブ・エイジング(活動的な高齢化)」で、市民の社会参加を通じた健康・安全の質の向上を提唱しているようです。

最も感じ入ったことは、おそらく藤が丘教会の皆様も同様に感じたと思うのですが、私たちがこのテーマに沿って今後も継続的にめざすべき姿は「エイジ・フレンドリーな教会」「認知症の人にフレンドリーな教会」「ケアラー・フレンドリーな教会」であるということ、またそれが、地域ネットワークの一部となり街づくりの重要な要因となる、ということでした。教会のビジョン策定に大きな示唆となるような気がし、なるほど日本中に教会があるとすることが役立つのだと夢がふくらみました。その一方で、しっかりと計画と努力が必要だというご指摘には肅然とさせられました。結論として「ともにケアする社会、地域共生社会に向けて」、①人と命の尊厳を守る、②多様性を認めあう、③つながりを大切にする、④ケアの価値を認めあう、⑤ケアする人のケアの輪を広げていく、という姿勢を肝に

銘じていきたいと考えます。

英国で孤独担当相を指名したメイ前首相の言葉も引用されましたが、孤独と孤立を防ぐというテーマは、今の私のように「俗世のしがらみから早く逃れたい」と孤独をかえって望むような心境にある人間には、まだ到達できない境地にあります。とても大切なテーマですので、どうか、既にその心境に達しておられる方の感想をお聴きできればと思います。

最後に雑感ですが、私が属する65歳の世代は自虐史観の教育を受けて育ち、国歌斉唱の際には拳をかざして沈黙し、戦前戦中の日本を否定し、さらには高度成長を遂げた日本を貶めつつ、国連や欧米陣営を無批判に信奉してきました。いま、それを反省して世界を見つめ直し日本を再評価する兆しが芽生える中で、日本が高齢者ケアで世界に先駆けているとしたら、慎み深く世界に範を垂れるべき好機の一つが与えられているのかもしれない。さらに個人的に、講演で大いに励まされたことがあります。私はライフワークを75歳までに完遂したいと夢見てきたので

すが、最近では活力と知の衰えがますます進んでいく気がして、達成は不可能ではないかと、少々諦めモードに浸ることがありました。この弱気は、もしかすると単にお酒の飲み過ぎが原因に過ぎないのではないかと、自分を甘やかさなければ百歳まで頑張るライフワークを達成できないか、というように励まされた次第です。

山口先生の講演と、企画された伝道教育担当役員の皆様に深く感謝致します。私たちそれぞれの上に、豊かな円熟期が訪れますように、主なる神に祈ります。



## ●野〇之さんより

今年も、役員として信徒の皆様のお役に立てる活動を目指しています。

早いもので、コロナが始まって3年になりました。2020年1月、ダイヤモンドプリンセス号の感染が伝わった初めの頃は、今までの生活が一変して本当にどうなってしまうのだろうという不安な毎日を過ごしていました。そして、今では一緒に共存していくしかないという気持ちに大きく移行しています。しかしながら、相変わらず感染者は減らず、国内の感染者も900万人を超えて、死者も3万人を超えてしまいました。本当に大きな生活の変化を余儀なくされたのですが、自分なりに何が変わったのかを振り返ってみました。

一番大きな点は、やはり人に会わなくなりました。毎日のうがいや手指の消毒は当たり前ですが、人を避けて生きるといって自分共の大きな変化に驚いています。公共の乗り物を避けて、人との接触機会を少なくして生活すると、一

人ではないことに感謝しています。私にとって、家族がいることはどれだけ幸せなのか身に染みてわかりました。普段はそんな大切なことに気づかずに、自分の好きな事ばかりしていた気がして恥ずかしくなります。そんな中で、毎日聖書日課を夕飯前に読んでいます。一日が終わり、夕げの前に開く聖書日課には主の思いを代弁する牧師先生の



思いが汲み取れて、とてもワクワクした気持ちで読んでいます。そして、明日も頑張ろうという気持ちにしてくれています。

6日ごとに代わる執筆者である牧師先生の、主との関わりが興味深いです。また、事前に聖書の箇所を調べてから読むなど、3冊目になってさらに楽しみが増えるばかりで、このままこの習慣を続けていきたいで

## 主日礼拝ライブ配信の回想録

9

ー心地よさを目指してー

田〇〇夫

そんなメディア委員の皆さんとの汗と涙の積み重ねが実を結び、2021年の春には全体を通して視聴できるライブ配信となり、6月には耳に心地よい音声を曲がりなりにもお届けすることができたまでとなりました。数年にも渡る試行錯誤の繰り返し経験は、今ではメディア委員一人一人の心のなかにゆとりを生み出し、以前でしたら突発的に起きるアクシデントに対してメディア委員皆でパニックになってしまうこともしばしばでしたが、今では予想外のアクシデントが発生したとしても落ち着いてその問題に対処出来るまでとなりました。そして、その大いなる成長の証は、ライブ配信担当者当番表として現れ、毎週担当者と補佐役の2人で持つて配信ができるまでに到達したのです。

まだまだ多くの課題も残されており、ライブ配信のためには今後も引き続き気を引き締めて、メディア委員の皆さんと一緒に歩み続けてゆく

所存ですが、コロナの収束の暁には、労をねぎらう宴を一度パーツと催したいと思っています。

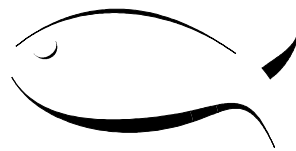
VI)最後に

2017年に主日礼拝のライブ配信構想を教会として持ち始めてから、2021年8月の現在に至るまで数々の問題や課題が山積し、大きな壁となつて立ちほだかつてきました。時には四面楚歌となり、どうすることも出来ずに白旗を上げたくなるような時もありましたが、何とかその壁に皆さんの力で持つて小さな穴をこじ開け、それを突破口に努力を積み重ねて現在に至っています。必死に対処しているときには周りを見回すゆとりはありませんでしたが、振り返ってみればいつも多くの皆さんの温かさに支えられていたことに気が付かれます。不安定な配信であったとしても、それでも毎週我慢強くそして辛抱強く藤が丘教会のライブ中継を見続け応援してくださった皆さまには、本当に感謝の気持ちでいっぱい입니다。そして、優しい言葉に包まれたご意見をお聞かせくださった皆さまにもこの場を借りしてお礼を申し上げます。

今思えば、にっちもさっちも行かない局面に際し「経費を出して、プ口の方に環境を整備してもらおう」という究極のご意見もありましたが、確かにそれも一理あり最善の策だとの思いもあつたのですが、しかし、委員皆で素人なりの知恵を出し合い力を合わせて何とか改善してゆく、そのプロセスと汗をかくその姿に価値を見出し、進歩は牛歩のようでしたが、この道を選んで正解だったと信じています。今後も予期せぬ問題が発生することでしょう。まだまだ茨の道は続くと思いますが、そ

の時は、今までの経験を生かしつつ先生を始め教会員の皆さまと一緒に前へ進んで行ければと願っています。

●ライブ配信における宣教・伝道の発展を祈りつつ。(主元)



### 今月の受洗記念日の皆さん

- 6日 ○田由○子姉
- 23日 ○野○子姉
- 25日 ○井○子姉、今○○子姉
- 30日 ○坂○美姉

おめでとうございます。

「実に、信仰は聞くことにより、しかも、キリストの言葉を聞くことによって始まるのです。」ローマの信徒への手紙 10章 17節  
 福音伝道会ウェブサイト <http://www.fujigaokalc.org/>  
 フェイスブックで礼拝のライブ中継をしています。(毎日朝11時から10時頃)

### 女性会だより

- 6月19日 13名参加
- 6月26日 11名参加
- 1 聖書の学び
- マタイによる福音書11章28節
- 2 例会
- (1) 2022年度女性会役員  
4名の承認
- (2) 会計報告
- (3) 女性の集い(6月4日)

### 報告

- (4) 女性会によるウクライナ支援について
- 物品販売の方法などの詳細を検討
- (5) お仕事会開催について
- (6) 神学校の支援について
- 次回の女性会は  
7月17日、24日を予定

### 教会の動向



6月5日は、聖霊降臨(ペンテコステ)の礼拝でした。この日と、翌12日の礼拝にて、聖餐式を執り行いました。5日の礼拝後、定例役員会が開かれました。7日、消防点検がありました。

12日の礼拝後、ルーテル学院大学教授の山口麻衣先生による講演会(ZOOM)が開催されました。15日に聖研、16日には発送作業をいたしました。18日(土)の午後、壮年による大掃除がありました。

19日と26日の礼拝後、第2回アンケートの報告会がありました。第2回で新たに出席されたご意見について、皆さんの評価をいただくため、第3回アンケートを実施し、今後宣教委員会、役員会で協議を経て、来年の宣教40年の宣教計画へつなげてまいりたいと思っています。その後グループごとに、半年ぶりの女性会が開かれました。

7月31日(日)は、信徒礼拝となります。○山○子さんが証しをしてくださいます。皆さんのご健康が守られますよう、お祈りします。